

社会情報学研究, Vol. 13, 1-10, 2007

K大学における学生間の国際交流

—学生調査の分析から—

磯田朋子*・香月保彦**・施 修平***・森本優希***

Interaction between Foreign Students and Japanese Students in K-University

Tomoko Isoda, Yasuhiko Katsuki, Shi Xiu Ping, Yuki Morimoto

This article is based on the surveys on international interaction in students of K-University, those are carried out in 2005 and 2006, using self-administered questionnaire.

The findings were as follows

- 1: Interaction between foreign students and Japanese students is not so active.
- 2: Language ability, sociability, acceptability for different culture, relative opinions about culture of own country and some factors promote international interaction
- 3: The stereotyped perception for culture of each other and some factors prevent students from active international interaction.

Key Words (キーワード)

Interaction (交流), Acceptability for different culture (異文化の受容), Stereotyped perception (ステレオタイプ)

I 背景及び問題意識

大学生における外国人学生の受け入れは、ごく一部のエリート学生を対象としたかつてのそれから大きく変化し、むしろ地方の弱小の大学において大きく展開する状況を迎えている。

1983年(昭和58年)8月の21世紀への留学生政策懇談会による「21世紀への留学生政策に関する提言」において、21世紀初頭に留学生受入れの規模を先進諸国並み(10万人)にすることという目標がかかげられて以来、受け入れ数は大きく増加し、1983年(昭和58年)に1万428人だった留学生は2003年(平成15年)10万9,508人に達し、以来目標を上回って増加し続けている。

とりわけ中国において、経済発展に伴い、高等教育への希求が高まる一方、それだけの受け入れが用意されていないというプッシュ要因と、18歳人口の減少に伴って国内の受験生をとりあっても安定的な経営が見込めない日本の地方大学側のプル要因とが重なって、中国からの留学生の数が飛躍的にのびている。

そうした背景から、K大学においても2002年から中国のいくつかの大学と協定を結んで多くの留学生を受け入れるようになり、今日では、全学生の約1/3を占めるにいたっている。

その留学生と日本人学生とは同じキャンパスでともに学生生活を営んでいるが、学生間の交流はあまり進んでいるように見えない。国際コミュニ

* 呉大学大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

** 呉大学大学院社会情報研究科・呉大学社会情報学部

(Graduate School and Faculty of Social Information Science, Kure University)

*** 呉大学大学院社会情報研究科 (Graduate School of Social Information Science, Kure University)

ケーションがとれる環境に恵まれていながら、交流ができないのはなぜか。こうした問題意識のもと、2005 年、2006 年に行った学生調査から、留学生と日本人学生との交流の実態、および、その促進要因、阻害要因等についてみていく。

なお、本稿で日本人学生と呼ぶのは、入試区分において留学生対象以外の入試をへて入学した学生をさすもので、日本国籍を有することをいうのではない。

II 調査概要

1 概念枠組み

(1) 調査項目

調査項目は大きく分けて 5 つの部分からなる。

- 1) 属性：(共通) 性別 学年 メインキャンパス 住居形態 喫煙習慣 収入(留学生のみ) 来日時期、留学前の学歴、婚姻状況
- 2) 学生生活：出席状況、成績、希望進路、サークル活動、アルバイト、イベントへの参加
- 3) 意識：
2005 年度：社交性 偏見の有無 外国／日本への興味・関心 自国中心志向
2006 年度：社交性・積極性、規範遵守の態度、同調度、個人主義的態度、
- 4) 交流の実態：交流の有無、交流場所、総合的評価
- 5) 相互の印象：留学(留学生と接する前)の日本(中国・韓国)の印象、現在の日本(中国・韓国)の印象(2005 年度調査のみ)

(2) 分析枠組み

なお、主として 1) から 3) を説明変数、4) を被説明変数として分析を行う。

5) の印象については、留学(留学生と接する前)の日本(中国・韓国)の印象を説明変数、交流の実態を被説明変数とする分析と、交流の実態を説明変数として現在の日本(中国・韓国)印象を被説明変数とする分析とを行う。

2 調査方法

自計式質問式法による調査を行う。

調査票は日本人学生用と留学生用を作成した。

項目のほとんどは同一の質問であるが、留学生用には留学目的など、一部留学生のみが回答する質問が含まれる。留学生版は、日本語で作った調査票をベースとして、中国語と韓国語に翻訳し、中国版、韓国版を作成した。

3 調査対象およびサンプリング

(1) 母集団とサンプリング

母集団は K 大学 S 学部の全学生である。

日本人学生は、学生名簿からの単純ランダムサンプリングによって抽出し、留学生については、全数が少ないので、悉皆調査とした。抽出方法が異なるため、厳密には同一母集団からのサンプリングとは言えないが、同一母集団のデータとみなして分析を行う。

(2) サンプルサイズと回収率

1) サンプルサイズ

2005 年度

日本人学生：381 名(抽出率 56 %)

留学生：213 名(抽出率 100 %)

2006 年度

日本人学生：319 名(抽出率 58.3 %)

留学生：186 名(抽出率 100 %)

2) 回収率

2005 年度

日本人学生 144 (回収率 67 %)

留学生 130 (回収率 61 %)

2006 年度

日本人学生：126 (回収率 67.7 %)

留学生：112 (回収率 60.2 %)

(3) 調査期間

2005 年度実査調査は 2005 年 12 月 6 日から 2005 年 12 月 23 日

2006 年度実査調査は 2006 年 11 月 24 日から 2006 年 12 月 8 日

(4) 配布・回収の方法

対象者を所属のゼミごとに整理し、必修のゼミナールの時間、もしくはその前後に学生に手渡しで配布し、その後回収した。

III 集計結果および分析

1 交流の実態

(1) 交流の程度

図1および図2は留学と日本人学生のそれぞれにおいて交流している学生の比率を示したものである。4段階で尋ねた後、「多いに交流している」、「交流している」と答えた学生を合わせてものを「交流している」とし、「あまり交流していない」と「全く交流していない」と答えた学生を合わせてものを「交流していない」として集計した。

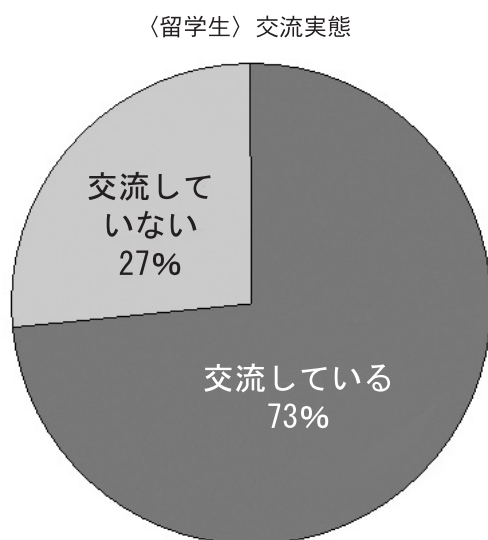


図1 留学生における日本人学生との交流
(2005年度)

留学生の交流している者の割合は73%、日本人学生の交流している者の割合は14%で、留学生の方が日本人学生より交流している比率が高い($\chi^2 = 98.701$, sig. = 0.000)。しかし、留学生はそもそも日本語や日本について勉強するため、あ

るいはいろいろな体験を求めて来ているのであるから、日本人との交流について、積極的であるのは当然のことと言えよう。そう考えるならば、約3割の留学生が「交流できていない」と答えていることに注目すべきかも知れない。また、全学生の1/3が留学生であることを考えるなら、日本人学生の留学生との交流は、いかにも低いと言えよう。

〈日本人学生〉交流実態

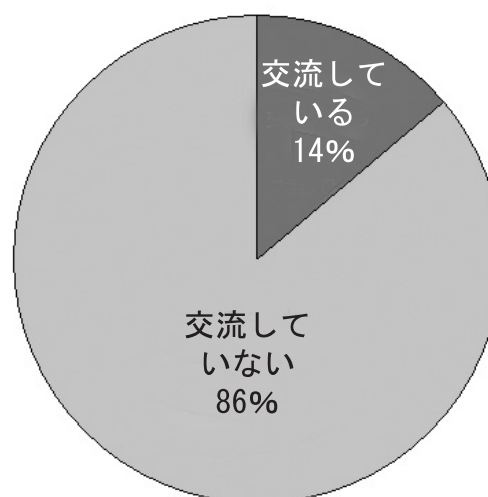


図2 日本人学生における留学生との交流
(2005年度)

次に、別の角度から交流の実態をみってみる。

「大学内であなたが話しをする留学生／日本人は次のどれに当たりますか？当てはまるものすべてに○をつけてください。」という質問に対して、複数回答可で回答を求めたものである。この質問に対し、Fの「いない」という選択肢に○をした者は、日本人学生ならば「話しをする留学生はいない」、留学生ならば「話をする日本人はいない」ということになる。その割合がそれぞれのどれくらいかを見してみる。

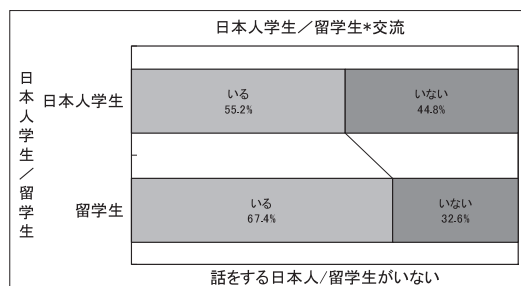


図3 話をする日本人（留学生）はいるか
（2005年度）

「いない」に○をしたのは日本人学生の方が、留学生より多く、ここでも、留学生の方は日本人学生と交流できているが、日本人学生は留学生と交流できていないという実態を見ることができる。 $(\chi^2 = 4.242, \text{sig.} = 0.039)$

授業などの場面における、言わば強い交流でなく、今少し積極的な交流をはかる意味で、2006年度調査では、授業以外での交流について聞いてみた。留学生の20.7%が授業以外でも日本人学生とよく話すと言っており、たまに話すを加えると、半数を超えるのに対して、日本人学生で授業以外でも留学生とよく話すと言っているものは4.7%と比べて少なく、日本人学生と留学生の割合を考慮しても、日本人学生が留学生と交流できていない状況があらわれている。 $(\chi^2 = 25.678, \text{sig.} = 0.000)$

次に、図3に示した、話をする日本人/留学生の有無と性別との関係を見ていく。

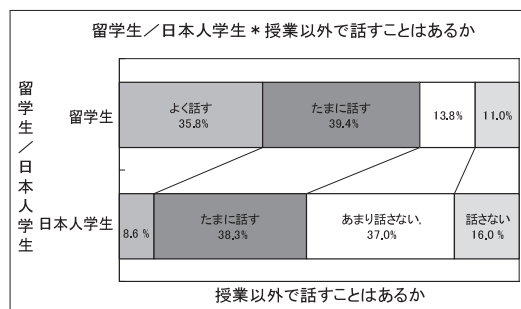


図4 留学生（日本人学生）×授業以外で話すことはあるか（2006年度）

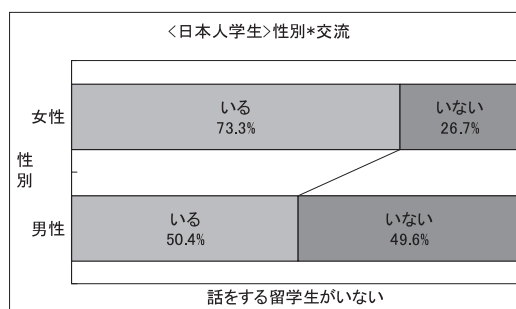


図5 性別×話をする日本人（留学生）はいるか
（2005年度）

日本人学生では話しをする留学生はいると答えた女性は男性より多く、日本人学生の中では、女性の方が男性より留学生との交流できていることがわかる。 $(\chi^2 = 5.024, \text{sig.} = 0.024)$

この関係は留学生ではみられなかった。

また、交流の有無、程度と性別の関連は、2006年度調査においても認められなかった。

(2) 交流をささえる資質

交流には、当人の個人的な資質も影響しているだろう。まず、留学生のみの質問項目の中から、日本語能力が関係しているかどうかを見てみる。

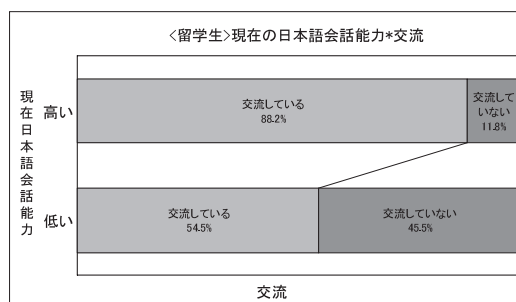


図6 日本語（会話）能力×交流（2005年度）

現在の日本語会話能力と交流の関係はどうなっているかを示したものが図6である。

会話能力が高いというのは「アルバイトでの会話に困らない」「他人とのディスカッションができる」などをさし、会話能力が低いというのは「日常会話（買い物など）に困らない」程度、あるいは

はそれ以下の者をさす。会話能力と交流実態の間には、会話能力が高い留学生は交流しているという関係が見られた ($\chi^2 = 17.580$, sig. = 0.000)。同様に、現在の日本語作文能力と交流の関係、また、留学生日本語能力試験レベルと交流の関係においても、能力が高い留学生は交流しているという結果が得られた。

以上3つのクロス分析から日本語能力と交流の間には関連が認められる。交流するには、日本語の能力が必要であり、ある程度会話の能力がある者であれば交流できるが、会話能力が低い学生は交流ができないと考えることができる。しかし、日本語能力と交流の間には、別の作用も考えられる。日本語能力を説明変数だとすれば、日本語能力が高いことで交流ができるということになるが、交流を説明変数、会話能力、作文能力などを被説明変数として考えてみるなら、交流を通して会話能力や作文能力などが高まったと考えることができる。そのどちらの作用が大きいかについてを明らかにするには、時系列の調査を行う必要があるが、2005年度調査と2006年度調査は個々の対象者の時系列データを作成する形では設計されておらず、その確定はできない。実際はその両方が作用し、日本語の能力と交流とが、相乗的に増していくものと考えられる。言い換えれば、日本語能力が低いために、日本人との交流が妨げられ、一層日本語を磨く機会から遠ざかる留学生がいるという問題が指摘できよう。

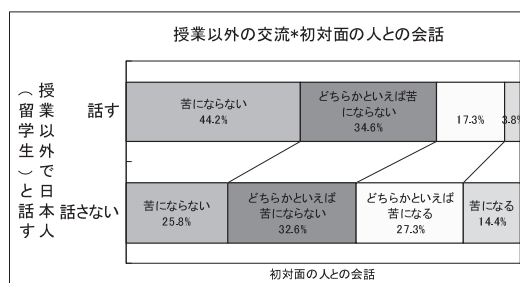


図7 「初対面の人と話すのは苦になりますか」 × 「留学生（日本人学生）と授業以外で話すことはありますか」（2006年度）

次に、個人的資質のひとつとして、社交性をとりあげてみる。「初対面の人と話すのは苦になりますか」という項目と交流の関係をみてみると、対留学生（日本人学生）と話す人には初対面の人と話すのも苦にならない人が多いことがわかる ($\chi^2 = *15.93$, sig. = 0.002)。この結果は、社交的な人の方が交流しやすいということを示しているものと考えられる。留学生／日本人との交流を促す要因として、個人の資質のうち、社交性をあげることができるだろう。

(3) 交流の場

次に、大学の利用状況と交流の関係から、何が交流の場となっているのか、について見ていく。

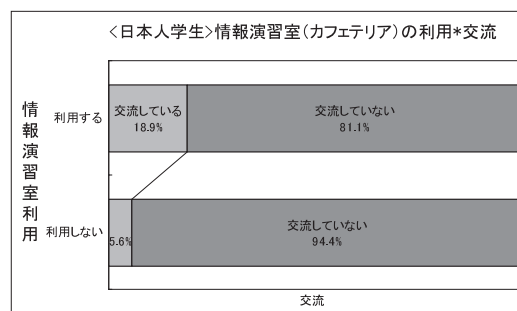


図8 情報処理演習室（カフェテリア）の利用 × 交流（2005年度）

大学施設について、日本人学生では情報演習室（カフェテリア）の利用と交流との間に関係が見られた ($\chi^2 = 5.016$, sig. = 0.025)。情報演習室（カフェテリア）利用する日本人学生は交流していると言える。留学生ではこの関係は見られなかった。留学生は自国の情報収集や、自国の家族、友人等との交流のためにコンピュータを活用している。とりわけ授業終了後、さらには夜間に情報演習室（カフェテリア）をよく利用する学生は相互に顔見知りとなり、交流が展開していくものと思われる。

また、喫煙と交流との間に関連が見られた。

タバコを吸う日本人学生は吸わない学生より交流していると答えており ($\chi^2 = 6090$, sig. =

0.014), 喫煙所が交流の場となっていることが伺われる。中国では, 相手にタバコをすすめるのは, コミュニケーションにとって重要なアイテムとなっている。これが, 日本人学生との交流に役買っている可能性もあるだろう。

学生が個人でコンピュータを所有する比率がますます高まり, 複数のキャンパスを行き来するというK大学の事情もあって, 情報演習室(カフェテリア)に長時間滞在する学生が少なくなり, 大学の禁煙化にともなって学内に喫煙所がなくなることは, こと, 留学生と日本人学生の交流という点からは, マイナスに作用することが考えられる。

3 交流を促進する／妨げる意識

日本人学生には話しをする留学生がいるか, 一方留学生には話しをする日本人学生はいるかと尋ねた項目と属性項目, 意識・態度項目とのクロス集計から, 交流を促す, あるいは妨げる要因は何かについて考えてみる。

(1) 規範遵守の態度

規範意識と交流との関係を見ると, 項目によっては統計的に有意でなかったものもあるが, おおよそ, 規範を守るという態度は留学生(日本人学生)と話するという態度と結びついている。

1) 交通ルールの遵守

まず「あなたは歩いているとき車が通らなくても, 必ず信号を待ちますか」という質問との関連でみてる。

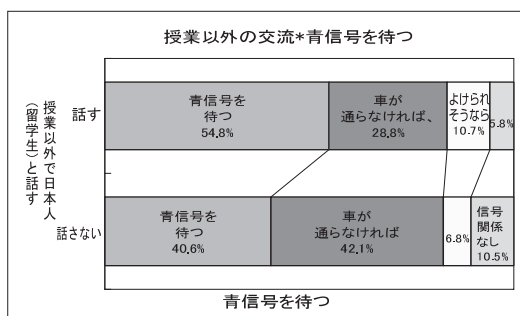


図9 「あなたは歩いているとき車が通らなくても, 必ず信号を待ちますか」×「留学生(日本人学生)と授業以外で話すことはありますか」(2006年度)

留学生(日本人学生)と話すと答えた学生には, 青信号をまつと答えるものが多く, 話さないと答えた学生に車が通っていなければ渡るものが多い。また, 信号に関係なく渡ると答えたものの比率も比較的高い。

信号を守るか否かに関して, 規範遵守の態度は交流と関連することを示している。

2) 学習態度

留学生/日本人と話する学生は, よい成績をとるためにはどんな努力もすると答えた学生の比率が高く, 話さない学生には努力しないと答えた学生の比率が高い。

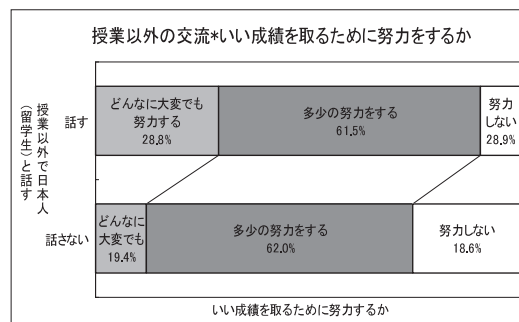


図10 「いい成績のためにはがんばりますか」×「留学生(日本人学生)と授業以外で話すことはありますか」(2006年度)

3) 携帯電話のマナー

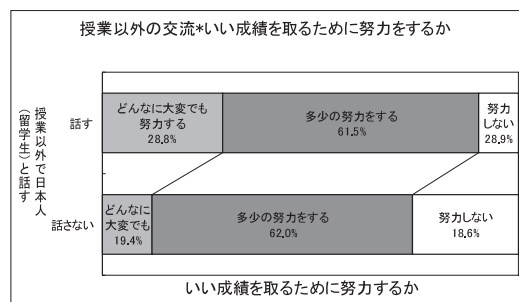


図11 「電車に乗っているとき携帯電話を利用しますか」×「留学生(日本人学生)と授業以外で話すことはありますか」(2006年度)

携帯電話に関するマナーは, 中国と日本でかなり違うようで, 中国ならば電車やバスの中でも携

帯の着信を受け、通話をするのは特別のマナー違反とはとられない。これをうけて、留学生の中には、電車の中でも着信をうけるという学生が多くいるが、留学生（日本人学生）と話をするかどうかと携帯電話のマナーとの関係を見ると、話しをすると答える学生には、電源を切る、マナーモードにするなどして、着信を受けないとする学生の割合が多い。ここでも、規範遵守的な態度を示す学生の方が交流ができているということが示されている。

以上のデータは、規範同調的な態度と交流が結びつくことを示していたが、規範は必ずしも普遍的ではなく、集団内規範として存在することも多い。規範同調的な態度は、時に、集団外の人間に対して排他的な意味合いをもつ。むしろ、身内の規範に批判的な姿勢が、異文化との交流の促進要因になる可能性を示すデータもある。

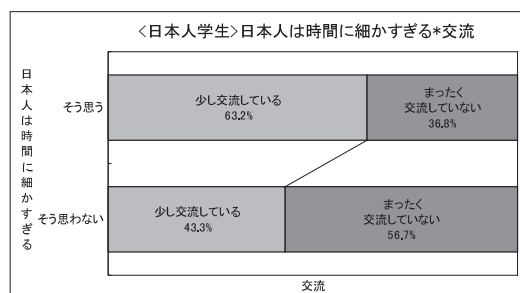


図12 「日本人は時間に細かすぎる」という意識×交流 (2005年度)

まず、日本人学生の中で「日本人は時間に細かすぎる」という項目から見ていく。日本人学生は全体的に交流している学生が少ないので、ここでは、「交流していない」と答えたものを「全く交流していない」とし、それ以外を「少しは交流している」として分析した。

「日本人は時間に細かすぎる」と思う日本人学生には、「交流している」という学生が多くなる ($\chi^2 = 5.659$, sig. = 0.017)。この意識は留学生では関連が見られなかった。

「日本人は時間に正確である」という意識を持っている日本人は多く、それゆえ、とかく時間にお

おらかな外国人に対して批判的な態度をとりがちになる。それに対して「日本人は時間に細かすぎる」という意識は、日本の「時間に正確である」という文化に対して批判的な反応であり、背景にあるのは自分の国の文化に対して客観的、相対的な態度と言えよう。結果として、「日本人は時間に細かすぎる」と考える日本人学生の方が、留学生と交流しやすいという傾向をうんでいる。

(2) 身びいきの態度

次に、自国の文化に対する身びいきの態度が、交流とどのように関連するかをみていく。

図8は、「ニオイの強い食べ物が苦手だ」という意識と交流とを示したものである。

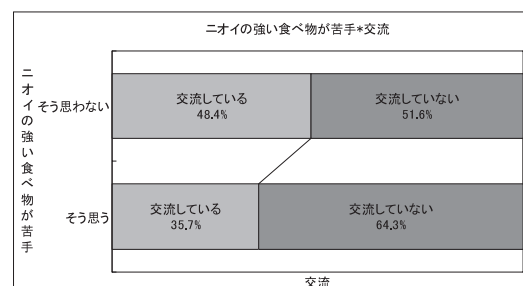


図13 「ニオイの強い食べ物が苦手」という意識×交流 (2005年度)

図13に示すように、ニオイの強い食べ物が苦手だと思わない学生の方がよく交流しているという結果がみられる ($\chi^2 = 4.291$, sig. = 0.038)。

日本人学生、留学生共に、ニオイの強い食べ物という言葉は外国の食べ物を連想し、これを苦手とする意識の中には、外国の文化に対する拒否的な感情、言ってみれば偏見が存在していると思われる。日本人は日本の食べ物にはニオイの強いものは少なく、韓国料理や中華料理の食材や香辛料にはニオイの強いものが多いと思っている者が多くいる。しかし、日本の食べ物にも、山椒等の香辛料、シソ等の香味野菜、沢庵をはじめとする漬物、さらには、納豆など植物系の、また、くさやの干物に代表されるような動物系の、多くの発酵食品があり、それらの多くはニオイの強い食べ

物である。にも関わらず、日本の食べ物にはニオイの強いものがなく（あるいは少なく）外国の食べ物にはニオイの強いものが多いというのは、それ自体が偏見であるとも言えるだろう。その偏見は日本人学生も、留学生も相互に持っていると言える。

ここで、日本人学生における、ニオイの強い食べ物が苦手という項目と留学生の声がうるさいという項目のクロス集計を見てみよう。

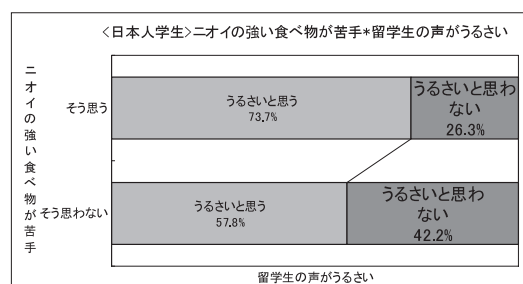


図 14 「ニオイの強い食べ物が苦手」という意識×「留学生の声がうるさい」という意識（2005 年度）

ニオイの強い食べ物が苦手かどうかは、個人の食べものの好み問題であり、留学生がうるさいかどうかは、声の音量という客観的なレベルの問題であるなら、この二つの変数は独立であると考えられるが、ニオイの強い食べ物が苦手だと答えた日本人学生は留学生の声がうるさいと答えている（ $\chi^2 = 3.925$, sig. = 0.048）。ニオイの強い食べ物が苦手かどうかは、単に個人の食べものの好み問題ではなく、日本的でないもの、個性の強いものに対する拒否的な態度と関連する意識であり、ニオイの強い食べ物が苦手だと答えた日本人学生は留学生に対しても拒否的な態度を示しているものと考えられる。この拒否的な態度が、留学生同志の会話の音量をうるさいと感じさせているのであろう。

さらに、自国の料理は世界一だと思いますか？という問いから、身びいきの態度を聞いてみる。自国の料理は世界一だと思う学生は多く、留学生では特に 60 %以上の学生がそう思うと答えてい

ることから、料理に関する身びいきはきわめて強いことがわかる。

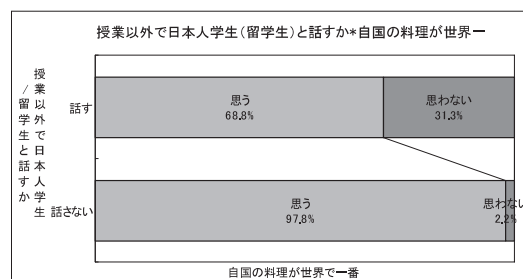


図 15 「自国の料理は世界一だと思いますか」×「留学生（日本人学生）と授業以外で話すことはありますか」（2006 年度）

「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を、「どちらかと言えばそう思わない」と「そう思わない」をあわせて 2 分割にした上で、日本人学生、留学生それぞれにおいて、留学生（日本人学生）と話すかどうかとのクロス集計をしてみると、留学生においては、日本人学生と話す学生には、自国の料理は世界一だと思うと答える学生の比率が低いことがわかった。（ $\chi^2 = 14.648$, sig. = 0.000）。自国の料理についても相対化できる態度が交流を促すということが考えられる。

(3) 異文化に対する態度

いくつかの特徴的な事例をあげて、そうした異文化について許容的かどうかと交流との関係を見ていく。

まず、スペインには、その店がはやっている証拠の一つとして、ナッツの殻などを床に落としたままにしているバーがあるという話を紹介した上で、そうしたバーに行ってみようかどうかを尋ねた。留学生（日本人）と話す学生にはぜひ言ってみようと思える学生が多く、逆に、話さないと答えている学生には、行かないという学生の比率が高い。

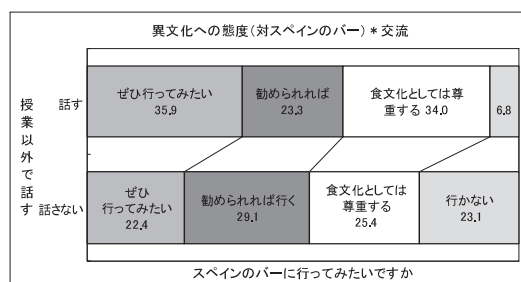


図 16 異文化に対する態度 (スペインのバー) 交流 (2006 年度)

他にも、留学生には、生魚を食べるなどの日本の食文化に対して、日本人学生には、犬の肉を食べるなどの留学生たちの出身の国や地域では一般的であるが日本では見られない食文化に対する受け入れ度を聞き、留学生／日本人と話すかどうかとのクロス集計を試みた。いずれも統計的に有意差があり、これらの結果は異文化に対して積極的あるいは積極的にないまでも許容的な学生は留学生 (日本人学生) と交流できるが、こうした異文化に対して拒否的であれば、交流ができないということを示している。

(4) 相互の印象

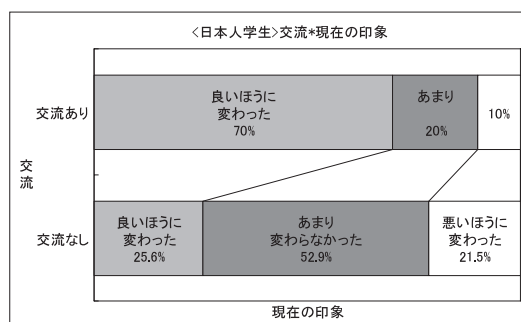


図 17 日本人学生からみた留学生の印象の変化 (2005 年度)

ここまでは交流を被説明変数として、どのような要因で交流が進んだり、妨げられたりするのを見てきた。

次に、交流を説明変数として、交流の結果、どのような影響があるのを見ていこう。

図 17 に示すように現在の印象と交流との間に関連が見られた。日本人学生において、交流していると答えたものでは現在、印象は良いほうに変わったと答える比率が高くなっている ($\chi^2 = 15.583$, sig. = 0.000)。

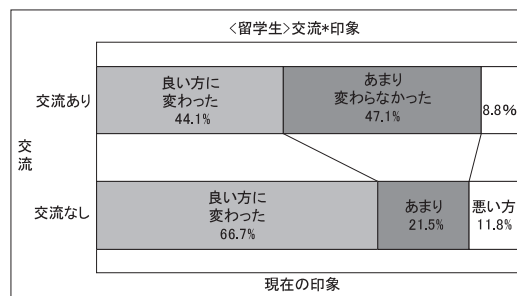


図 18 留学生からみた日本人学生の印象の変化 (2005 年度)

留学生も同様の結果を示している ($\chi^2 = 8.027$, sig. = 0.018)。交流することで、相互の理解が進む。理解すればするほど、相手の嫌な点、受け入れがたい点を発見し、あるいは、相手の拒否的な態度に出会って印象が悪くなるというケースも認められるが、ここでは交流によって印象が良くなる方に变化している点が目立つ。

IV まとめ

2回の調査結果から、留学生と日本人学生の交流を促進する要因、阻害する要因をみてみた。留学生の日本語能力、個人的な資質としての社交性などと並んで、規範遵守の態度や、学習努力などの優等生志向との関連が見られた一方で、自らの文化を相対化する姿勢が交流にとって重要であることも伺われた。

異文化に対して関心をもち、おおらかに受け入れられることが交流を促進する。反対に、偏見を含む固定的な見方は、否定的な態度を生み、交流を妨げると考えられるが、留学生／日本人と交流している学生の間では、交流以前より印象がよくなったという反応がみられることもあわせて考える

なら、肯定的態度は、交流の条件となるとともに、相手を受け入れ、交流する者は、自分の偏見に気づき、偏見を払拭するチャンスを得て、さらに交流を広げていくという相乗効果をあげていく可能性をもつと考えられる。

育～高等教育改革の新展開～」平成 15 年度文部科学白書 文部科学省

3)「大学の国際化と留学生支援のあり方 2005 年度第 2 回高等教育政策研究セミナー報告書京都高等教育研究, 2005 年 10 月

参考文献

- 1)「文部省第 116 年報」(昭和 63 年度)文部省
- 2)「創造的活力に富んだ知識基盤社会を支える高等教

謝辞

最後に、対象者の皆様はじめ、調査に協力をしてくださった皆様に感謝します。